母子たちのオアシス　温水の湧き出る小さな無人島

総勢２８名の母子たちが浜辺で本能に立ち返って

全裸で入り混じり想像を絶する淫乱大乱交！！

本島から歪な形に突き出た岬(みさき)から船で小一時間クルーズすると、太古から人が居住することのなかった小さな無人島がある。
数年前、とある冒険家によってそこに温水が湧き出る泉が発見され、以来少しずつそこへ人が出向くようになった・・・・・。

話は一転、本島では未曽有の**母子相姦**ブーム！！

人々は“関係性”と言う窮屈な枠を取っ払い、本能を剥き出しにした近親相姦を謳歌し楽しみ、いつでもどこでも場所時間に関係なくセックスをする日々。

そんな最中、温水湧き出るその無人島が**“母と息子”**による**“乱交会場”**に恰好に適しているとして選ばれた。

灼熱の日差しが降り注ぐ日中、あるいは星が輝く夜、性欲ムンムンの母子たちがやる気満々でそこへ向かい、そして・・・。
人間の祖先、つまり原人・・・いや猿人・・・・もはや猿。
そこまで立ち返り、遮るもののない自然の中でセックスを繰り広げる。

母子たちにとってそこは**大乱交のオアシス**となったのである。

・・・・・・・・・・・・・・・。

船底が穏やかに揺れる水面をかき分けて進んで行く。

白い泡が船の通り道に次々と立ち上り、瞬く間に再び透明な海水へと戻る。

「ふああぁぁ～～っ！！だけどやっぱり街のホテルのパーティールームや集会所を借りてする大乱交もいいけど、やっぱり無人島は最高よねっ！」

船首の近くに立ち、遠くを見ながら澄んだ笑顔でつぶやいたのはハルトの母のユウリ。

「ほんとっ！すっごく楽しみだわっ！！アフフッ！」

ダイチの母のリオナが風に揺れる艶やかな髪をかき上げユウリに返答する。

海面を鋭く切り裂く船底のスピード感に比例して、薄っぺらい夏の衣服から露出する“美女”たちの肌を強く通り過ぎる風。

そして美女たちのそばにはウキウキ気分の母と同様に期待で浮足立ちがちな少年たち。言うまでもなく彼女たちの息子である。

「僕たちも楽しみだよっ！！まだかなぁ、まだかなぁっ！！ワクワクッ！！」

今回総勢２８名の母子たちがこの無人島へ参加することとなった。

事前に計画を練って実施された、無人島で３泊する旅行形式の野外パーティーだ。

２８名という人数に丁度見合った小さな船で向かう。

ザァ・・・ザァ・・・・ザァ・・・・・・・

広い船室の窓から広がる青。

「あと少しで到着ね。なんだか不思議な気分。これから無人島で私たち･･･フフフッ」

母の一人が船の上で浮かべたその笑顔は、果てなく広がるオーシャン

ブルーを眺めながら浮かべるものにしてはあまりに卑猥であった。

そして、本島を定刻通り出発した船はさほど時間もかかることなく無人島の島辺へ到着。

言うまでもなく無人島であるため港湾化などはされておらず、自然そのままの砂浜だ。

「じゃあ、ひとまず島の中心部に集まりましょっかっ！みんなそのまま荷物を持って向かってね！」

今回の計画と企画に主体的に加わったリーダー的役割のミユナが号令をかけた。彼女はタケヒトの母である。

「はぁーーーいっ！！」

船から降りた母子たちはミユナのその指示通り一斉に島の内部へと歩いて向かう。島の周囲の長さですら３キロ弱の小さな島であるため、島の畔から中心部までそれほど距離はない。

島の中心部には、あくまで人工物は使わず人手だけで地面を掘り下げ周囲に石を組み上げて作った、温水の泉を元にした露天温泉がある。

「やっぱり無人島っていいわよね。雰囲気だけで胸、躍っちゃうっ！！」

母たちの中でもグラマーなボディを持つシンジの母のメグミが白いキャミソールの上から大きなそのおっぱいを両外側から手で掴んでユサユサしてみせた。

「あたしたち、ここでエッチなコト、あんなコトやこんなコト、いろぉ～んなことたっぷりするんだものねっ・・・ほんとに楽しみぃっっ！！」

まだ日は明るい。母子たちはそこで荷物を下ろし、ひとまずお湯につかりながら本番へのステップと言わんばかりに懇親を深めるのだ。

酒池肉林の淫乱ステージである闇夜の浜辺までの時間を・・・・。

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと光栄です。